

新学習指導要領に向けての学習活動の在り方が見直されている。新学習指導要領では、アクティブ・ラーニングを「主体的・対話的で深い学び」と定義されており、さらに学校現場への浸透を試みているが、長年培われてきた学校文化を大きく変えていくにはまだ時間がかかると考えられる。本章では、「主体的・対話的で深い学び」をさらに具体的に表記し、授業者側がしっかりと意味を理解することが必要であることが述べられている。

子どもの学ぶ力を育てるために、「主体的・対話的で深い学び」の観点を取り上げ考察する。1つ目に心を動かす原動力について、2つ目に指導者の支援について、3つ目に「深い」学びについてである。

1つ目の心を動かす原動力についてである。著者は「主体的」な学びとは「探求」することと表記しており、その原動力として子どもの「心が動く」活動が絶対条件だと述べている。子どもの「心が動く」ために、先行する実体験、身体の五官から感知される情報、子ども自身の体験に根差した「知的な気づき」の三つがあげられている。教材づくりにおいても、著者は「子どもの心が動く」ためにこの三点の重要性を指摘している。さらに筆者はこの三点に加え、「人の営みに出会う」という点も視野に入れた。人々の工夫や努力、やりがいなどによって社会が形成されていくことを知り、社会形成者の一人として心が動き、より、「主体的」な学びへと発展していくのではないだろうか。

2つ目の指導者の支援についてである。対話的な学びを成立するためには、指導者の役割が重要である。本章では教師の計画から外れないように授業を統制することが指導力ではなく、子どもの「気づき」や「発言」を取り上げ、つなぎ、活かして対話的な学びにするように学習活動を指導・支援しなければならないと述べられている。もちろん子ども同士が協同的に「探求」し「知を構築」していく力が育まれるために指導者がそれらをつないでいく技術は大切である。しかし、これはあくまでも指導者は「教え手」、子どもは「学び手」という固定的な枠組みで構成されているのではないだろうか。ESDで求められる教室環境は指導者も子どもも「学び手」になることだ。先行き不透明な社会の中では指導者も学び手の一人であるということを自覚し、子どもと一緒に対話しながら問題を解決する姿勢でなければ、結局子どもは指導者の指導の下、対話している「ふり」を続けていくのではないかと考える。筆者が昨年行った第6学年の総合的な学習の時間では、地域の文化財について取り上げた。初めその遺産について全くの無知だった子どもが調べ学習を通して、筆者よりもその文化財について詳しくなり、想い入れも強くなり、「自分の言葉」で語れるようになっていた。このように「教え手」、「学び手」の立場を固定するのではなく流動的になるような学習支援が求められるのではないだろうか。

3つ目に「深い」学びについてである。本書では「深い」学びを実現するためには振り返りの視点を明確にし、自己評価を丁寧に行うことが重要であると述べられている。学びを通して自分の意見がどのように変容したのか、またそのきっかけは何かというのを客観視し、自覚させながら「世界」と関わらせるために振り返りを書かせるとも述べられている。子ども自身の振り返りも重要であるが、それを評価する側も「その後」の活動に向けてコメントを入れなければならない。子どもの振り返りに下線やコメントを入れるなどして、どれだけその学びに価値があったか、素晴らしい気づきがあったかなどを授業者がフィードバックすることでより子どもは自身の学びに自信をもち、「自分が学んだ」という実感をもつことができるだろう。

以上が子どもの学ぶ力を育てるための一考察である。「心が動く」や「子どもの学びに火を着ける」といったように、学ぶ力とは子どもの内にあるものを鼓舞させて初めて育つものであることがわかる。